ISSN 0287-7902 （京産大論集）
ISSN 0287-9735 （外国語系）

フランス語の関係節における文体的倒置について

平塚　徹

京都産業大学論集

外国語と外国文学系列　第29号

平成14年3月

フランス語の関係節における文体的倒置について*

平塚　徹

要　旨

主節平叙文において倒置主語が焦点であることは明らかである。しかし、以下の論拠により、フランス語関係節の倒置主語は焦点であると考えることはできない。1)制限的関係節は、通常その内容が前提されており、焦点を含みえない。2)関係節の倒置主語は、主節平叙文の倒置主語と異なり、前方照応的に解釈することができる。3)関係節においては、1～2 語からなる主語のなかでは、固有名詞や人間を指す単数の主語が倒置しやすい。4)関係節においては、倒置主語の後に容易に前置詞句や副詞句が現れうる。以上より、関係節の倒置主語は焦点ではないと結論できる。

関係節においては、individuation の高い主語の方が、そうでない主語よりも倒置しやすい。このことから、以下の仮説を提案する。制限的関係節においては、主語が動詞よりも先行詞の指示対象の確定に寄与しており、かつ、動詞が主語と先行詞の間の関係を表しているにすぎない場合に文体的倒置が可能となる。

フランス語関係節における文体的倒置に対するこの制約は、名詞句の指示対象の確定に対する寄与が大きい要素ほど名詞句内の右方に来て、寄与が小さい要素ほど左方に来るという通言語的傾向の現れとして理解できる。この傾向は、以下の現象において観察される。1)多くの言語において、不定代名詞は、それを修飾する形容詞に先行する。2)ロマンス諸語において、外延を狭めない形容詞は、名詞に先行する。

キーワード:フランス語、文体的倒置、関係節、不定代名詞、語順

1. はじめに

文体的倒置を適用された主語が焦点であることは、ほぼ定説と認めてよい。フランス語においても、東郷・大木(1986)は、以下の倒置構文では主語名詞句が焦点になっていることを確認している。

(1) Eclata la guerre.(東郷・大木, 1986, p.1)
(2) Derrière les cavaliers marchaient les soldats.(*ibid.*)

しかし、倒置主語が焦点であることは、主に主節平叙文を対象にして論じられてきた。これに対して、フランス語では、疑問詞疑問文や関係節においても、文体的倒置が頻繁に見られる。

(3) Et où habite ce seigneur ?(Dumas, A., *Le Comte Monte-Cristo,* in *DISCOTEXT 1*)
(4) nous sommes là dans le quartier où habite votre ancienne maîtresse;(Murger, H., *Scènes de la vie de bohème,* in *DISCOTEXT 1.*)

問題は、これらの環境における文体的倒置も主語の焦点化と考えてよいかである。平塚(近刊)では、疑問詞疑問文において文体的倒置を適用された主語が焦点ではないことを示した。本稿では関係節においても倒置主語はやはり焦点ではないことを主張する。

以下、第 1 節では、関係節の倒置主語も焦点であるとする仮説を支持する論拠を見る。第 2 節では、関係節の倒置主語が焦点だとする仮説の問題点を提示する。第 3 節では、関係節において文体的倒置を引き起こす要因について仮説を提案する。第 4 節では、この要因が、名詞句内での語順に関する通言語的な傾向の現れと考えられることを論じる。

2. 焦点化説の根拠

2.1. 主語

主節平叙文においては長い主語ほど倒置しやすいことは広く認められている。これは、長い主語ほど焦点になりやすいので、倒置しやすいのだと説明される(cf. Jonare, 1976, p.28; Fournier, 1997, pp.104-105)。

同様に関係節においても、主語が長いほど文体的倒置が適用されやすい。Fuchs(1997, pp.152-154)は、Le Monde の 1994 年 2 月 18 日号から採集した名詞句主語を含む関係節のコーパスにおいて、正置主語の平均語長は 3.29 語であるのに対して、倒置主語の平均語長は 7.26 語だったと述べている(その他に、Grevisse(1986, p.1612)、Wall(1980, pp.81-90)も参照されたい)。長い主語ほど焦点になりやすいのだから、この事実は倒置主語が焦点であることを示唆する。

また、Fuchs(1997, p.154)は、主語が不定代名詞・指示代名詞・所有代名詞だと文体的倒置が適用しにくいことを指摘して、これを代名詞が rhème になりにくいからと説明している。この説明は、倒置主語が焦点であるとする考え方と同じである。

2.2. 動詞

動詞に助動詞・否定辞・法の標識が付加されて長くなるほど、文体的倒置は困難になる(Nordahl, 1973, p.119; Fuchs, 1997, pp.155-156)。特に、Fuchs は文体的倒置が適用されている場合には、動詞の部分は三つ以上の要素を含むことはほとんどないと述べている。例えば、次のように要素が二つの場合には文体的倒置が見られる。

(5) Autre enjeu spéculatif : les abords de la gare du Midi, *où doit débouler le TGV* (*Le Monde*, in Fuchs, p.156)

これに対して、以下の例のように三つ以上の要素がある場合には正置が見られるのである。

(6) Nouveau coup dur la semaine dernière quand les Etats-Unis, *sur lesquels la Grèce pensait pouvoir s'appuyer*, décident à leur tour de reconnaître la FYROM, une reconnaissance suivie, mardi dernier, par celle de l'Australie, où vivent un demi-million de Grecs (*Le Monde*, in Fuchs, p.156)

(7) Or, tous les auteurs du recueil ont pris garde d'éviter ce piège assez grossier, *où Monsieur Edelman s'évertue à vouloir les faire tomber* (*Le Monde*, in Fuchs, p.156)

動詞部分が複雑なほど多くの情報を含んでおり焦点となりやすいので、逆に主語は焦点になりにくいと考えられる。よって、上述の現象は倒置主語が焦点であることを示唆している。

他方、Blinkenberg (1928) は、動詞の種類によっても文体的倒置が適用できる可能性が変わってくることを指摘している。先ず動詞がコピュラ être の場合には、通常、文体的倒置が適用される (pp.115-116)。また、exister, se trouver の他、主語の指示対象の存在を表す動詞の場合にも、文体的倒置が適用されているものが多い (pp.116-117)。更に、動詞が先行詞によって予想されて、意味的に重要でない場合にも文体的倒置が適用されやすい。

(8) le journal que lit M. Chantal (Blinkenberg, 1928, p.117)

(9) la vie que menait la noblesse (*ibid.*)

ここでは、動詞 lire や mener は意味的に軽く、ほとんどの場合以下のように言い換えられるほどである。

(10) le journal de M. Chantal (Blinkenberg, 1928, p.117)

(11) la vie de la noblesse (*ibid.*)

Fuchs (1997, pp.157-158) も同様の言い換えの例を挙げている。以上のような動詞は全て意味内容が乏しく焦点になりにくいので、逆に主語の方が焦点にな

りやすく、文体的倒置が適用されやすいと説明することができる(cf. Fuchs, 1997, pp.156-159)。

2.3. 直接目的語名詞句

直接目的語名詞句も関係節における文体的倒置を妨げる(Grevisse, 1986, p.1613; Nordahl, 1973, p.122; Fuchs, 1997, pp.145-147)。例えば、Nordahl は、(12)の関係節に文体的倒置を適用した(13)や(14)は、かなり容認度が低下すると述べている。

(12) Lénine promettait de bâtir un Etat dans lequel les cuisinières exerceraient les plus grandes responsabilités. (Nordahl, 1973, p.123)

(13) (...) dans lequel exerceraient les cuisinières les plus grandes responsabilités. (*ibid.*)

(14) (...) dans lequel exerceraient les plus grandes responsabilités les cuisinières. (*ibid.*)

これに対して、主節平叙文においても、直接目的語名詞句がある場合、文体的倒置が困難であることが知られている(東郷・大木, 1986, p.6; Fournier, 1997, p.108-109)。

(15) Là surveillaient une dizaine de gendarmes le magasin.

(++)　(+)　(0)　(−)****　(−−)*****

(東郷・大木, 1986, p.6)[1)]

(16) Là surveillaient le magasin une dizaine de gendarmes.

(++)　(+)　(0)　(−)***　(−−)******

(*ibid.*)

これは、東郷・大木(1986, pp.6-8)によると以下のように説明される。先ず、倒置された主語は焦点として解釈される。ところが、直接目的語も焦点とし

て解釈されやすい。よって、両者が共存すると、どちらを焦点にするのかストラテジー上の矛盾が生ずるために不自然になるのである。そうすると、関係節において直接目的語を伴う文体的倒置の容認度がかなり低いことにも、同じ説明が適用できると考えられる。

2.4. 導入される要素

Fuchs (1997, p.160) は、後置要素は rhème として、前置要素は thème として考えることにより、関係節での文体的倒置を捉えようとしている。そして、このことを正置の場合と倒置の場合とで導入される要素の違いによって、例示している。まず、次の倒置文では、先行詞から位置づけを表す動詞により、rhème である倒置主語が導入されていると考えられる。

(17) Il regarda longtemps la flèche du mât de hune écrire des signes invisibles dans le ciel bleu *où s'était égaré un fin croissant de lune en porcelaine translucide* (Tournier, in Fuchs, 1997, p.160)

これに対して、次の正置文では、関係節内の主語は rhème である述語を導入するための thème として機能している。

(18) Un bon hôtel doit être celui dans lequel un client doit pouvoir sortir s'il a envie de sortir, et ne pas sortir si sortir est pour lui une corvée. (Perec, in Fuchs, 1997, p.160)

このような Fuchs の見方も、関係節の倒置主語を焦点と見なす考え方と同じである。

2.5. 対比されている要素

丹羽 (1982) は、フランス語の関係節における倒置主語が焦点であることをしめす証拠として、以下の例を挙げている。

(19) * Elle a reçu le cadeau que Jean avait envoyé, non pas Paul. (丹羽, 1982, p.32)
(20) Elle a reçu le cadeau qu'avait envoyé Jean, non pas Paul. (*ibid.*)

ここでは、関係節内の主語 Jean は Paul と対比されており、その意味で焦点であると考えられるが、それには文体的倒置が適用されなければならない。よって、倒置主語は焦点であると考えられる。

Fuchs (1997, p.161) も、主語が倒置された次の例文は、主語が un voleur ではなく un client、あるいは deux clients ではなく un client という対比が想定されないと発話できないと述べている。

(21) Un bon hôtel doit être celui *dans lequel peut entrer un client* (Fuchs, 1997, p.161)

これに対して、主語が倒置されていない次の例文では、太陽が沈むのではなく、沈まないという対比を構築できる。

(22) Le Club est longtemps une entreprise profitable, bientôt une multinationale, *sur laquelle le soleil ne se couche plus* (*ibid.*)

以上のように、主語の倒置が、主語に対して対比的な解釈をもたらすなら、これは倒置主語が焦点になっているという仮説を支持する。

2.6. まとめ

関係節における文体的倒置には、主語・動詞・直接目的語に対して、主節平叙文の場合と類似した制約が認められる。また、関係節の倒置主語は導入されたり、対比されたりして、焦点として機能していると思われる例もある。このように、関係節での文体的倒置が主語の焦点化であるという仮説には、利点が多い。しかしながら、この仮説には問題点がある。次節ではこのことを見る。

3. 焦点化説の問題点

3.1. 関係節と断定

英語においては、文体的倒置は主節平叙文において見られる主節現象であり、関係節のような従属節では普通容認されない。

(23) * The rotunda in which stands a statue of Washington will be repainted. (Hooper and Thompson, 1973, p.489)

文体的倒置が断定を伴っているのに対して、従属節の内容は前提されていることが多い。そのため、従属節に文体的倒置を適用すると、前提されている内容を断定することになり、矛盾を生ずるのである。

しかしながら、Hooper and Thompson (1973) が明らかにしたとおり、関係節であっても非制限的用法の場合には文体的倒置が可能になる。

(24) The rotunda, in which stands a statue of Washington, will be repainted. (*ibid.*)

非制限的関係節の内容は断定されているために、断定を伴う文体的倒置を容認するのである[2)]。

以上のように、英語では、文体的倒置は従属節においても見られるものの、その場合には、従属節の内容が断定されているという条件を満たしていなければならない。

ところが、フランス語の場合には、様々な従属節において文体的倒置が広範かつ頻繁に見られる。しかも、明らかに、断定を伴わない場合においても文体的倒置が観察されるのである。例えば、次の関係節を含む文を見られたい。

(25) Celle qu'aime François, c'est Marie.

ここでは、先行詞の指示対象は関係節の内容によって確定するので、関係節は制限的用法であり、その内容は前提されている。それにもかかわらず、文体的倒置が可能なのである。よって、フランス語では、断定を伴うことは、文体的倒置を適用することの必要条件とはなっていない。焦点は断定されている領域に現れると考えられるので、フランス語の関係節における文体的倒置は主語の焦点化とは考えられない。

3.2. 主語の前方照応性

関係節での倒置主語と主節平叙文での倒置主語は、前方照応的に解釈できるかどうかで異なっている。

(26) Il prédit que le roi allait mourir bientôt.

a. Le lendemain cet événement arriva.

b. Cet événement arriva le lendemain.

c. * Le lendemain arriva cet événement.

ここでは、後続する文の主語は先行する文の補文の内容を受けているが、(c)の文体的倒置は容認されない。これに対して、次のように後方照応の場合には文体的倒置が容認される。

(27) Le lendemain arriva cet événement : le roi fut assassiné par un jeune étranger.

これは、倒置主語が焦点であると考えると自然に説明できる。ところが、関係節においては、以下のように前方照応が可能である。

(28) Le roi mourut en 1300.

a. Le jour où arriva cet événement, le prince était en voyage à l'étranger.

b. Le jour où cet événement arriva, le prince était en voyage à l'étranger.

このことは、2.4 で述べた倒置主語が導入されているという議論が一般に成り立っていないことを示しており、関係節における倒置主語が焦点でないことを示唆している[3)]。

3.3. 主語の指示対象

文体的倒置一般については、有生の主語より無生の主語の方が倒置しやすい。例えば、自動詞を含む文体的倒置を扱った Gildin (1980, pp.69-70) の以下の統計を見られたい。

表 1：主語の有生性と倒置 (Gildin, 1980, p.69)

	有生	無生
正置	308 (59%)	214 (41%)
倒置	11 (26%)	31 (74%)

($p < .01$)

Atkinson (1973, pp.18-21) の統計でも、倒置構文では有生主語が 151 例だったのに対して、無生主語は 810 例と圧倒的に多い。更に、文頭に前置詞句を伴った主節平叙文における文体的倒置を扱った Fournier (1997, p.107) も、倒置主語は無生のものが多いと述べている。このような傾向は、有生主語が無生主語よりも主題になりやすいと考えることによって理解できる。つまり、その分、無生主語の方が焦点になる確率が高いので、倒置されやすいのである。

また、Gildin (1980) は、定名詞句の方が不定名詞句よりも、正置されやすいことを示している。

表 2：主語の定性と倒置 (Gildin, 1980, p. 69)

	定	不定
正置	420 (80%)	102 (20%)
倒置	18 (42%)	24 (58%)

($p < .01$)

この結果は、定名詞句は不定名詞句よりも主題になりやすいと考えることによって説明できる。更に、Gildin(1980)は、単数の主語の方が複数の主語よりも、正置されやすいと述べている。

表3：主語の数と倒置(Gildin, 1980, p. 70)

	単数	複数
正置	385(74%)	137(26%)
倒置	25(60%)	17(40%)

($p < .05$)[4)]

これも、単数名詞は複数名詞よりも明瞭な指示対象を有するために主題になりやすいと考えることによって説明できる。

以上の統計は、必ずしも主節平叙文に限ったものではないが、主節平叙文における文体的倒置の様相をかなり反映していると考えられる。これに対して、関係節に限定して文体的倒置を観察すると、以上とはかなり異なった傾向が出てくる。

Wall(1980, pp.83-84)は、関係節おける 1～2 語からなる主語を統計的に調査した結果、固有名詞が倒置されやすい傾向があると述べている。Wall の統計では、主語の種類や主語と動詞の相対的長さによる細かい分類をして倒置と正置の数を挙げている。ここでは、固有名詞と倒置の相関性を確認するために、主語が固有名詞のものと普通名詞のものという二種類にまとめて、倒置している例と正置している例の総計を計算した[5)]。

表4：固有名詞と倒置(Wall(1980, pp.83-84)に基づく)

	固有名詞	普通名詞	計
倒置	98(81%)	274(68%)	372
正置	23(19%)	129(32%)	152
計	121	403	524

($\chi^2=7.02$, $p < 0.01$)

この統計より、主語が固有名詞の場合は、普通名詞の場合に比べて有意に倒置している率が高いことが確認できる[6)]。

また、Wall (1980, p. 84) は、統計的数値は示していないが、人間を指す単数の名詞句が倒置する比率が高いとも述べている。Fuchs (1997, p.155) も、人間を指す主語は、非生物の主語より倒置しやすいと述べている。Fuchs が Le Monde から採集したコーパスでは、倒置主語の 42 例のうち 60%近くが人間を指す主語であったのに対して、正置主語では 115 例のうち 32%にすぎなかった。

固有名詞や人間を指す名詞が主題になりやすいことを考えると、このような傾向は、関係節における倒置主語を焦点と見なす考え方では、説明が困難である。

他方、Wall (1980, pp.83-84) の 1〜2 語からなる主語の正置と倒置に関する統計を、定名詞句主語と不定名詞句主語という分類にまとめ、倒置している例と正置している例の総計を計算したところ、定名詞句主語の方が倒置している率が高かったものの、有意な差は認められなかった[7)]。

表 5:定性と倒置 (Wall (1980, pp.83-84) に基づく)

	定	不定	計
倒置	330 (89%)	42 (79%)	372
正置	141 (11%)	11 (21%)	152
計	471	53	524

($\chi^2 = 1.53$, $p < 0.25$)

主節平叙文においては不定名詞句の方が焦点になりやすいために倒置する率が高いと考えられる。しかし、関係節では少なくとも主語が短いときには、このような傾向は現れなかった。このことも、関係節においては倒置主語が焦点でないことを示唆している。

以上のように、関係節における倒置主語は一般の倒置主語と異なる様相を呈している。よって、関係節での文体的倒置を主節平叙文における文体的倒置と同じように見なす考え方には問題があると言える。つまり、関係節における倒置主語が焦点であるとする考え方には疑問があるのである。

3.4. 倒置主語に後続する要素

主節平叙文においては、文末に他の要素が現れると容認度が低下する。

(29) Juste à ce moment-là est entrée Alice. (東郷・大木, 1987, p.4)

(30) ?? Juste à ce moment-là est entrée Alice par la fenêtre. (*ibid.*)

(31) A cette époque-là travaillaient dans cette usine des ouvriers portugais. (*ibid.*)

(32) ? A cette époque-là travaillaient des ouvriers portugais dans cette usine. (*ibid.*)

Jonare (1976, p.62) は、収集した約 2800 の倒置構文の中で、文末に前置詞句補語を有するものは 2 例しか無かったと述べている。また、東郷・大木 (1987, p.4) も、収集した 230 例以上の倒置構文の中に、倒置主語の後に状況補語を有するものは一つも無かったと述べている。東郷・大木 (1986, p.4) によると、これは以下のように説明される。倒置主語は焦点であるが、焦点は文末に来るのが自然である。しかし、文末に他の要素が存在すると、どちらを焦点とするかに関して矛盾を生じて、容認度が低下するのである。

これに対して、関係節では、倒置主語の後に他の要素が現れることは、特に主語が短い場合には、それほど希ではない。表 6 は、副詞句か前置詞句を一つ伴う関係節における語順に関する Wall (1980, p.102) の統計である。原典では動詞の法と時制に基づいて分類した数字を挙げてあるが、ここでは、合計を計算して掲載する。

表6：関係節での副詞句・前置詞句を含めた語順（Wall（1980, p.102）に基づく）

語順＼語数	1〜2	3〜6	7以上	合計（百分率）
V S C	47	25	0	72（10%）
V C S	20	80	29	129（17%）
S V C	326	133	26	485（65%）
S C V	9	1	0	10（ 1%）
C V S	2	11	2	15（ 2%）
C S V	6	2	0	8（ 1%）
Vaux C Vpp S	2	3	1	6（ 1%）
S Vaux C Vpp	12	6	3	21（ 3%）
合計	424	261	61	746（100%）

（S：主語、V：動詞、C：副詞句・前置詞句、Vaux：助動詞、Vpp：過去分詞）

Jonare の場合には収集した倒置構文全体での比率であるのに対して、Wall の場合には副詞句か前置詞句を一つだけ含む倒置構文に対する比率なので、両者を数値的に比較することはできない。しかし、関係節においては倒置主語の後に他の要素が来ることはそれほど希ではないと言える。以下、Wall が引用している例を若干挙げておく。

(33) Les vaccinations (...) dont bénéficie l'humanité aujourd'hui (in Wall, 1980, p.106)

(34) le succès que remportaient les chips sur le marché britannique. (*ibid.*)

(35) Les sentiments qu'a Marc pour moi vous sont-ils connus ? (*idem*, p.109)

(36) Ce fut l'idée que prit Hélène de lui dans le wagon qui les portait vers l'humble coin du Finistère. (*ibid.*)

また、Korzen（1996）によると、主節平叙文において時を示す句を倒置主語の後にもってきた(37)は不自然であり、倒置主語の前にもってきて(38)のようにしなければならない。

(37) ? Devant la gare stationnait la belle voiture de votre père, tous les dimanches. (Korzen, 1996, p.36)

(38) Devant la gare stationnait, tous les dimanches, la belle voiture de votre père. (*ibid.*)

ところが、それに対して、関係節においては(39)のように時を示す句が倒置主語の後に来ても構わないのである[8)]。

(39) L'endroit où était garée la voiture de votre père, avant-hier, était mal choisi. (*idem*, p.35)

このことも主節平叙文では倒置主語の後に他の要素が現れることが困難なのに対して、関係節ではそうではないことを示している。この事実は、倒置主語を焦点とする考え方では説明できない。

3.5. まとめ

本節では、以下の事実を見た。1)制限的関係節は概ね前提領域であり、焦点と相容れない。2)関係節における倒置主語は前方照応的に解釈できる。3)関係節では、固有名詞や人間を指す単数の名詞句が倒置しやすい。4)関係節は倒置主語の後に容易に他の要素を許容する。これらに基づいて、制限的関係節における文体的倒置は主語の焦点化ではないと考えられることを論じた。

4. 倒置主語の individuation

4.1. 主語の指示性

Korzen(1983)は、主語が不定代名詞 quelqu'un だと文体的倒置が妨げられると述べている。

(40) Voici la chambre où a couché {? quelqu'un / mon oncle}. (Korzen, 1983, p.66)

実際、以下の作例でも、不定代名詞が倒置しにくいことが確認できる。

(41) Celui que François a tué, c'est Jean.
(42) Celui qu'a tué François, c'est Jean.
(43) Celui que quelqu'un a tué, c'est Jean.
(44) ? Celui qu'a tué quelqu'un, c'est Jean.

他の不定代名詞も、やはり倒置しにくい。例えば、rien について、Fuchs (1997, p.154) は以下の例を挙げている。

(45) Le fournisseur des ateliers royaux de tapisserie, décorateur prolixe, exécute des allégories des saisons *que rien ne sauve de la banalité* (Fuchs, 1997, p.154)
(46) * (...) que ne sauve de la banalité rien (*ibid.*)

また、Wall (1980, p.81-82) は、対象としたコーパス中に tout le monde を倒置している例を見いだせなかったと述べている。

(47) elle a ses évidences intimes, que tout le monde a et qui par conséquent ne prouvent rien. (Wall, 1980, p.82)
(48) C'est ce que tout le monde me dit. (*ibid.*)
(49) ces nouveaux technocrates dont tout le monde parlait (*ibid.*)

しかも、Wall も指摘しているとおり、ここでの動詞は意味的に軽く、倒置が好まれる種類のものであるにもかかわらず正置されている。Fuchs (1997, p.154) は (49) に倒置を適用すると不自然であるとしている。

(50) ??? (...) dont parlait tout le monde. (Fuchs, 1997, p.154)

tout le monde や personne に関しても倒置を適用しにくいことを以下の作例で確認した。

(51) Celle que François aime, c'est Marie.
(52) Celle qu'aime François, c'est Marie.
(53) Celle que tout le monde aime, c'est Marie.
(54) ? Celle qu'aime tout le monde, c'est Marie.
(55) Celle que personne n'aime, c'est Marie.
(56) ? Celle que n'aime personne, c'est Marie.

これは、不定代名詞を焦点にしにくいと考えることによって説明できると思われるかもしれない[9)]。しかしながら、第 2 節で見たように、制限的関係節にこの説明を適用するわけにはいかない。その上、そもそも、(41)-(44)や(52)-(56)で挙げている作例では関係節の内容は前提されており、焦点とは相容れない。

更に、Fuchs(1997, p.155)によると、(57)のような不特定な主語や、(58)のような総称的な主語もほとんど常に正置される。

(57) Elle nous étonne parce qu'elle s'étonne. Rien n'est plus délicieux que de partager la surprise *qu'un écrivain se fait à lui-même* (Le Monde)
? (...) la surprise que se fait à lui-même un écrivain (Fuchs, 1997, p.155)
(58) Dans un milieu *où les talents s'arrachent*, les meilleurs techniciens ont tenté en vain de s'approprier le champion (Le Monde)
? Dans un milieu où s'arrachent les talents (*ibid.*)

以上より、不定の主語は倒置しにくいと考えられる。

4.2. individuation

3.3 で見たように、Wall (1980) は、関係節においては、主語が短い場合に限定すると、固有名詞や人間を指す単数の名詞句が倒置しやすいと述べている。また、Fuchs (1997) も人間を指す主語が倒置しやすいと述べている。そして、4.1 では、不定代名詞や非指示的な名詞句は倒置しにくいことを見た。関係節において倒置を促すこれらの要因は、Hopper & Thompson (1980, p.253) の individuation を構成する要因に数え上げられているものである。

(59)

INDIVIDUATED	NON-INDIVIDUATED
proper	common
human, animate	inanimate
concrete	abstract
singular	plural
count	mass
referential, definite	non-referential

(Hopper & Thompson, 1980, p.252)

Hopper & Thompson (1980) においては、transitivity を構成する要因として目的語の individuation を考えている。しかし、この individuation という概念をもともと提唱した Timberlake (1977) においては、ロシア語における否定生格や動詞に語彙的に要求される生格の消失の過程を促進する要因として考えられたものであった。そこでは、individuation は、名詞句の指示対象が個体として概念化されている度合い、逆に言うと、指示対象が数量化されにくい度合いを表すものであった。本稿では、Hopper & Thompson (1980) を受けて、名詞句の指示対象が背景から明確に区別されて際立っている度合いと考える。

ここで、これまでの観察を、関係節においては individuation が高い主語名詞句の方が倒置しやすいとまとめることができる。これを説明するために以下の仮説を提案する。

(60) 制限的関係節においては、以下の(a)と(b)を満たす場合に、文体的倒置が適用される。

(a) 主語名詞句が先行詞の指示対象の確定に寄与している程度が動詞よりも高い。

(b) 動詞は主語の先行詞に対する関係を表しているにすぎない。

名詞句の individuation が高ければ、それだけその指示対象は認知的に際立っており、他の指示対象を確定するためのいわば参照点として機能しやすい。例えば、individuation の極めて高い固有名詞「太郎」は、individuation の低い不定代名詞「誰か」よりも参照点として有効に機能する。ある女性を指示するのに、「太郎の妻」と言うと指示対象はほぼ一意的に確定するが、「誰かの妻」では指示対象は不明確にしか確定されない。

制限的関係節は、先行詞の指示対象を関係節の内容で制限していくという機能を有している。そこで、主語名詞句は individuation が高ければ高いほど、先行詞の指示対象を確定するための参照点として機能しやすいと考えられる。つまり、先行詞の指示対象の確定に寄与する度合いが高くなる。よって、このような主語名詞句は、仮説(60)により、倒置しやすいことになる。逆に、individuation の低い主語の場合には、先行詞の指示対象の確定に対する寄与が小さくなり、倒置しにくくなる。

以上の議論を、(41)～(44)(=(61)～(64))に適用すると以下のようになる。

(61) Celui que François a tué, c'est Jean.

(62) Celui qu'a tué François, c'est Jean.

(63) Celui que quelqu'un a tué, c'est Jean.

(64) ? Celui qu'a tué quelqu'un, c'est Jean.

関係節の主語が固有名詞 François である場合、主語の方が先行詞 celui の指示対象の確定に対する寄与が大きく、動詞 a tué は主語の先行詞に対する関係を表しているにすぎないと捉えることが可能なので、文体的倒置を適用しても

自然である。勿論、逆の捉え方をすることも可能なので正置も自然である。ところが、主語が不定代名詞 quelqu'un の場合には、主語は先行詞の指示対象の確定にはほとんど寄与していない。むしろ、ほとんど、動詞の部分が表している「殺された」という情報だけで先行詞の指示対象は確定されている。そのため、文体的倒置は不自然になると説明できるのである。

(51)～(56) (=(65)～(70)) もほぼ同じように説明できる。

(65) Celle que François aime, c'est Marie.
(66) Celle qu'aime François, c'est Marie.
(67) Celle que tout le monde aime, c'est Marie.
(68) ? Celle qu'aime tout le monde, c'est Marie.
(69) Celle que personne n'aime, c'est Marie.
(70) ? Celle que n'aime personne, c'est Marie.

主語が固有名詞の場合には、先行詞の指示対象の確定に対する主語の寄与が大きく、動詞は主語の先行詞に対する関係のみを表していると捉えることが可能なので、文体的倒置は自然である。それに対して、主語が不定代名詞の場合には、指示対象が漠然としており、先行詞の指示対象の確定に対する寄与は小さい。それよりも動詞の部分によって表されている「愛されている」とか「愛されていない」という情報の方が先行詞の指示対象の確定に寄与している。このため、文体的倒置は容認度が低いのである。

4.3. 現象の説明

2.1 で見たとおり、関係節においても長い主語の方が倒置しやすい。このことも、仮説 (60) と合致する。なぜなら、長い主語ほど、含んでいる情報量の多さから、先行詞の指示対象の確定に対する寄与が大きくなると考えられるからである。3.3 で見たように、individuation の高い主語の方が倒置しやすい傾向が 1～2 語からなる主語に限った統計で現れているが、このことは、主語の長さが individuation よりも倒置を促す要因として強いことを示唆している。

2.2 では、動詞が長くなるほど文体的倒置が適用されにくいことを見たが、これも仮説(60)と合致する。動詞が長くなると、情報量が多くなり先行詞の指示対象の確定に対する寄与が大きくなるだけでなく、主語と先行詞との間の単なる関係を表しているとは捉えられなくなるからである。また、存在を表す動詞や先行詞から想起されやすい動詞の方が文体的倒置を引き起こしやすいことも、このような動詞は主語と先行詞の関係を表すものとして捉えられやすいためと説明される。

なお、主節平叙文と関係節では文体的倒置に現れやすい動詞の範囲が異なっている。例えば、Fournier(1997, p.117)は、文頭に前置詞句を有する主節平叙文での文体的倒置においてもっとも頻繁に現れる動詞を大きく二つに分類している。一つ目は前置詞句で表される時空間での位置に主語の指示対象を位置づけるものである。これには、以下のものがある。

・動的位置決定:
  ・移動動詞：arriver, sortir, monter, venir, surgir, passer.
  ・事態の開始と終了を示す動詞：naître, mourir, commencer, apparaître, avoir lieu, s'ouvrir, dater.
・静的位置決定(=être)：figurer, reposer, s'ouvrir, être + ppé.

これは、ほとんど存在や出現を表す動詞であると考えることができる。二つ目は、前置詞句と主語の関連を示す動詞であるが、これには以下のものがある。

・後続・付加：se succéder, s'ajouter, se mêler, répondre.
・等価：répondre, correspondre, s'opposer.
・依存：résulter, dépendre.

Fournier は、これらの動詞を、時空間での位置づけから派生した抽象的な位置づけを表す動詞と見なしている。主節平叙文に現れやすいこれらの動詞は、主語の指示対象を談話内世界に導入するのに適した意味を持っている。これ

は、主節平叙文における文体的倒置が主語を談話に提示する機能を果たしているからと考えられる。

関係節においても、確かに存在などを表す上述の動詞は文体的倒置を引き起こしやすい。しかし、文体的倒置に現れる動詞は主節平叙文ほどには偏っていないのである。例えば、主節平叙文の文体的倒置では他動詞は極めて少ないが、関係節では、関係代名詞が直接目的語であれば、むしろ頻繁に現れる。Wall (1980, pp.43-66) は関係節において倒置を促す動詞を、identité、localisation, direction, appartenance, aspiration, production, perception/énonciation を表すものとしたが、この分類に該当する動詞は非常に多岐にわたっている。また、逆に、倒置を促さない動詞を、sentiment、changement を表すものとしたが、この分類に該当するものでも、文体的倒置が適用されている例は多数見られる。このことは、関係節における文体的倒置の機能が、主語の提示ではないことを示唆している。むしろ、関係節においては、仮説 (60) で述べたように、主語の先行詞に対する関係を表しているにすぎない動詞が文体的倒置を促すと考えた方がよい。

2.5 で見たとおり、丹羽 (1982) は、(19) (=(71)) と (20) (=(72)) を関係節における倒置主語が焦点であることをしめす証拠として挙げている。

(71) * Elle a reçu le cadeau que Jean avait envoyé, non pas Paul. (丹羽, 1982, p.32)
(72) Elle a reçu le cadeau qu'avait envoyé Jean, non pas Paul. (*ibid.*)

この場合、確かに、関係節内の主語 Jean は Paul と対比されており、対比的な焦点であると考えられる。しかし、このような主語を倒置しなければならないことは、仮説 (60) でも説明できる。なぜなら、ここでは、対比されている主語が先行詞の指示対象の確定にとって決定的な役割を果たしているからである[10)]。

2.3 では、直接目的語名詞句が文体的倒置を妨げることを見た。これも、直接目的語が存在すると、動詞は単なる主語と先行詞との関係を表すものではなくなるので、文体的倒置を妨げるのだと説明できる[11)]。

4.4. 不定代名詞が倒置している例

4.1 で不定代名詞の倒置が困難であることを見た。しかし、文体的倒置が可能かどうかは、主語名詞句だけで決まるのではなく、あくまでも動詞との関係で決まる。実際、電子コーパス *DISCOTEXT 1* で検索すると、主語が不定代名詞であっても文体的倒置が適用されている例が極めて希ではあるが存在している。特定の作家に偏っていることから文体的な要因も関わっていると思われるが、動詞の意味内容は希薄になっている。例えば、次の例では、もともと意味内容の希薄な faire が使われている。

(73) Non pas, c'est ce *que ferait tout le monde.* (Dumas, A., *Le Comte de Monte-Cristo*, in *DISCOTEXT 1*)

次の例では、「手紙」と言えば「書く」というように、先行詞から予想の付きやすい動詞が使われており、やはり動詞の意味内容がかなり軽くなっている。

(74) On comprend, à la rigueur, que les lettres *que vous écrit quelqu'un* soient à peu près semblables entre elles et dessinent une image assez différente de la personne qu'on connaît pour qu'elles constituent une deuxième personnalité. (Proust, M., *La Recherche :La Prisonnière*, in *DISCOTEXT 1*)

「迷子になった犬」と言えば、誰かが自分のものだと言う出来事が想起されやすいので、動詞 réclamer は意味的に軽くなると言える。

(75) Ne pense donc plus à rien et tâche de dormir, pauvre petite chienne perdue *que ne réclamera personne.* (Bloy, L., *La Femme pauvre*, in *DISCOTEXT 1*)

先行文脈にでてきている動詞を繰り返す場合も、やはり意味的に軽くなる。

(76) Brichot avait, en effet, du goût pour M. De Charlus et, s'il avait eu à se reporter à quelque conversation roulant sur lui, il se fût rappelé bien plus les sentiments de sympathie qu'il avait éprouvés à l'égard du baron, pendant qu'il disait de lui les mêmes choses *qu'en disait tout le monde,* que ces choses elles-mêmes. (Proust, M., *La Recherche :La Prisonnière*, in *DISCOTEXT 1*)

先行文脈で「家の前をうろついていた」と言えば、人が出てくることが当然予想されるので、やはり動詞 sortir の意味内容は軽くなる。

(77) Deux jours s'écoulèrent, Félicien rôdait devant la petite maison, fou de douleur, aux aguets des nouvelles. *Chaque fois que sortait quelqu'un,* il défaillait de crainte. (Zola, É., *Le Rêve*, in *DISCOTEXT 1*)

以上のように、動詞の意味内容が希薄な場合には、不定代名詞の倒置も全く不可能ではない[12)]。

このような例が希ではあるが存在していることを考慮すると、不定代名詞が倒置されにくいことを形式的な制約で説明することは不適切であり、仮説(60)で説明する方が望ましいと言える。しかも、仮説(60)の方が、主語名詞句の individuation に応じて文体的倒置が適用される比率が変化するという統計的事実も捉えることができるのである。

4.5. まとめ

関係節においては、不定代名詞の倒置が困難であるだけでなく、主節平叙文と異なり、individuation の高い主語の方が低い主語より倒置しやすい。このことから、制限的関係節においては、主語名詞句が先行詞の指示対象の確定に寄与している程度が動詞よりも高く、動詞の方は主語の先行詞に対する関係を表しているにすぎない場合に、文体的倒置が適用されるという仮説を提案した。また、この仮説により様々な現象を説明した。最後に、不定代名詞が倒置している例外的な場合を検討して、文体的倒置の容認可能性があくまでも主語と動詞との兼ね合いで決まることを強調した。

5. 名詞句内での語順

5.1. 不定代名詞と形容詞の語順

関係節においては不定代名詞の主語を倒置するのが困難であるが、このことは名詞句全体の最後に不定代名詞をもってくることを妨げるという結果をもたらす。ところが、名詞句の最後に不定代名詞が現れないようにする傾向が通言語的に観察される。それは、不定代名詞を形容詞で修飾しようとした場合に、形容詞が不定代名詞に後置されるという傾向である。このことを、先ず、名詞を修飾する形容詞が普通その名詞に先行する言語で見る。

(a) 英語

英語では、形容詞は名詞を修飾する場合には通常その名詞に先行するが、不定代名詞を修飾する場合には逆の語順になる (cf. Bolinger, 1952, pp.1137-1138)。

(78) {something / nothing / anything} interesting

これは、人を指す不定代名詞 someone, somebody, anyone, anybody, no one, nobody についても同じである。

(b) ロシア語[13)]

ロシア語では、形容詞は名詞に先行するのが通常である。ところが、不定代名詞 čto-to「何か・あるもの」、čto-nibyd'「(何でもよい)何か」、kto-to「誰か・ある人」、kto-nibyd'「(誰でもよい)誰か」を修飾する形容詞は、その後にくる (和久利, 1960, p.181 ; Wade, 2000, p.161-162)。

(79) kto-to　vysokij　(Wade, 2000, p.161)
ある人　高い
「ある背の高い人」

(80) On　bormotal　čto-to　neponjatnoe.
彼は　ぶつぶつ言っていた　何か　よく分からない
「彼は何かよく分からないことをぶつぶつ言っていた。」
(*idem*, p.162)

(c) 現代ギリシア語[14)]

現代ギリシア語においても、名詞を修飾する形容詞は名詞に前置される方が普通である[15)] (Mirambel, 1959, p.196; Holton et al., 1997, p.286)。

(81) mia　kokkini　karekla　(Holton et al., 1997, p.286)
不定冠詞　赤い　椅子
「赤い椅子」

(82) o　oreos　antras　(*ibid.*)
定冠詞　ハンサムな　男
「ハンサムな男」

ところが、不定代名詞 kati「何か」に対しては、形容詞は後置される。その場合、形容詞は定冠詞を伴ったり、伴わなかったりする (Mirambel, 1959, p.199, p.201; Holton et al., 1997, p.286)。

(83) kati　to　oreo　(Holton et al., 1997, p.321)
何か　定冠詞　美しい
「何か美しいもの」

(84) kati　sinithismeno　(*ibid.*)
何か　いつもの
「何かいつものこと」

同じことは、不定代名詞の tipota「何も…ない」についても言える (Mirambel, 1959, p.199; Holton et al., 1997, p.286)。

(85) Den　itan　tipota　to　spoudeo.
ない　であった　何も　定冠詞　重要な
「それは重要なことではなかった。」
(Holton et al., 1997, p.324)

(86) Den　itan　tipota　asinithisto.　(*ibid.*)
ない　であった　何も　異常な
「それは異常なことではなかった。」

更に、疑問代名詞 ti を修飾する形容詞も、後置される。ただし、この場合には、通常、定冠詞を伴う (Holton et al., 1997, p.327)。

(87) Ti　to　kenourio　ihe simvi ?
何　定冠詞　新しい　起きていた
「どんな新しいことが起きていたのか。」
(Holton et al., 1997, p.327)

(d) デンマーク語

デンマーク語では、英語と同様に、形容詞は名詞に先行するが、不定代名詞 noget「何か」や alt「全てのもの」に対しては形容詞が後置される。

(88) Vi　fik　noget　godt　at　spise.
私たちは　得た　何か　よい　のに　食べる
「私たちは食べるのによいものを得た。」
(Allan et al., 1995, p.231)

(89) Han　elsker　alt　dansk.　(*idem*, p.209)
彼　好きだ　全て　デンマークの
「彼はデンマークのものが全て好きだ。」

(e) スウェーデン語

スウェーデン語でも、不定代名詞 något, någonting「何か」、inget「何も…ない」、inga「誰も…ない」、allt「全てのもの」に対して形容詞が後置される(Holmes and Hinchliffe, 1994, p.186, p.188, p.179; Björkhagen, 1923, p. 124)。

(90) någonting　gott　(Björkhagen, 1923, p. 124)
何か　よい
「何かよいもの」

(f) ドイツ語

ドイツ語でも、形容詞は不定代名詞と共に用いるときには後置される。

(91) etwas Wichtiges「なにか重要なもの」(ヘルビヒ・ブシャ, 1982, p.289)
(92) irgendwer Bekanntes「誰か知っている人」(*ibid.*)
(93) jemand Fremdes「誰か見知らぬ人」(*ibid.*)
(94) niemand Bedeutendes「重要な人は誰も…ない」(*ibid.*)
(95) nichts Neues「新しいものは何も…ない」(*ibid.*)

この場合、形容詞は名詞化していると見なされており、そのことは頭文字を大文字にするという書記法に反映されている。

このうち etwas Gutes「何かよいもの」や nichts Gutes「よいものは何も…ない」においては、形容詞は不定代名詞と同格と意識されている。そのため、例えば与格支配の前置詞 mit「…で」や zu「…に」の後では、(96)のように形容詞も与格になる。

(96) {mit / zu}　etwas　Gutem　(Paul, 1959, p.304)
{で/に}　何か　よい[与格]

しかし、Gutes は、本来、名詞化された形容詞の属格であった。この属格は部分の属格であったので、etwas Gutes は「よいもののうちの何か」という意味であった。その後、この形態が中性主格・対格と再解釈されて、ついには不定代名詞と同格となったのである[16)17)] (Paul, 1959, pp.304-305; Dal, 1962, p.27)。

一方、alles「全てのもの」、viel (es)「多くのもの」、wenig「ほとんど…ない」といった量を表す不定表現に対しても形容詞が後置されることが多い。

(97) alles Gute「全てのよいもの」(Hammer, 1995, p.126)
(98) viel Interessantes「多くの面白いこと」(*ibid.*)
(99) wenig Interessantes「面白いことはほとんど…ない」(*ibid.*)

(g) オランダ語

オランダ語では、不定代名詞 iets / wat「何か」、niets「何も…ない」に対して形容詞が後置されるが、その時、形容詞には -s という語尾が付く (Kruisinga, 1924, p.88; Donaldson, 1997, p.90; Fehringer, 1999, p.7)。

(100) iets　nieuws　(Donaldson, 1997, p.90)
何か　新しい-S
「何か新しいもの」
(101) niets　sterkers　(*idem.*)
何か　強い-比較級-S
「何かより強いもの」

同じことは、veel「多くのもの」、allerlei「あらゆるもの」、weinig「ほとんど…ない」、een heleboel「多くのもの」、genoeg「十分な量」という量を示す語句や wat voor「どんな」についても成り立っている (Donaldson, 1997, p.90; Kruisinga, 1924, p.88; Fehringer, 1999, p.7)。

(102) veel　　lekkers　　(Fehringer, 1999, p.7)
　　多くの　おいしい-S
　　「多くのおいしいもの」

形容詞に付く-s は、かつての属格語尾であったと考えられる(Donaldson, 1997, p.91)。よって、オランダ語のこの表現は、ドイツ語の etwas Gutes と同様に、もともと部分の属格を用いたものであったと考えられる。

以上、見てきたとおり、多くの言語において不定代名詞を形容詞で修飾する場合、語順を入れ替えたり、部分の属格に由来する形式を用いたりして、不定代名詞が名詞句の最後に来ないようになっている。このことが成り立っている不定代名詞の範囲は言語によって異なっているようである。言語によっては、疑問代名詞や量を表す表現を形容詞で修飾する場合にも不定代名詞と同じことが成り立っている。英語においては、形容詞が後置される不定代名詞と一般の名詞との間に境界例とおぼしきものも認められる。Bolinger(1952, pp.1137-1138)によると、things をはじめ events、times、fortunes、matters 等の名詞は、things incredible、events American、times medieval のように形容詞が後置されることがある。

以上見てきたように、形容詞が後置される条件には、言語間でも言語内でも変動がある。しかし、いずれにしても指示対象が漠然としたものを名詞句の最後にもってくるのを避けようとする力が働いていると考えることができる。ここから、次の仮説を提案する。

(103) 名詞句内では、名詞句全体の指示対象の確定に対する寄与が小さい要素から大きい要素へと配列しようとする傾向が存在する。

そして、この傾向は、言語によって現れ方が異なっているが、ある程度、通言語的に顕現しているものと考えられる。ここで、仮説(60)を、その顕現の一つとして捉えることができる。つまり、仮説(60)では、先行詞の指示対象

の確定に対する寄与の小さい要素が関係節の最後の位置に現れることが妨げられるのだが、これは、名詞句全体の指示対象の確定に対する寄与の小さい要素を名詞句の最後の位置にもってくるのを妨げた結果と捉えることができるのである。

しかし、不定代名詞が形容詞で修飾されている場合と、不定代名詞が関係節の主語になっている場合とでは、名詞句全体の指示対象の確定に対する不定代名詞の寄与の仕方が異なっているので、同じように論じることはできないと思われるかもしれない。というのも、前者では不定代名詞は名詞句全体の指示対象が不定であることを表しているのに対して、後者では名詞句全体の指示対象とある関係にあるものが不定であることを表しているからである。しかしながら、ここでは、この違いは重要ではない。いずれにしても、名詞句全体の指示対象の確定に対する寄与が小さいという点に関しては変わらないからである。

以下では、仮説(103)を例証する他の事実をロマンス諸語から挙げる。

5.2. ロマンス諸語での不定代名詞と形容詞

5.1 では、形容詞が名詞に先行するのが普通である言語を見てきたが、形容詞が名詞に後続するのが普通であるロマンス諸語においても、不定代名詞を形容詞で修飾するときには、普通名詞を修飾するときとは異なった構文になる。

(a) フランス語

フランス語においては、形容詞は名詞に後置されるのが普通である。ただし、以下のような極めて頻繁に用いられる短い形容詞は、名詞に先行するのが普通である。

(104) grand, petit, bon, mauvais, beau, joli, nouveau, ancien, jeune, vieux, etc.

また、後述するとおり、これ以外の形容詞でも名詞に前置される場合がある。しかし、quelque chose、rien、quelqu'un、personne 等の不定代名詞を形容詞で

修飾する場合には、形容詞は前置詞 de を介在して後置される。このことは、(104)に挙げた名詞に通常前置される形容詞についても成り立っている。

(105) quelque chose de {bon / beau / nouveau}
(106) rien de {bon / beau / nouveau}

つまり、不定代名詞を形容詞で修飾する場合には、不定代名詞は名詞句の最後に来ることはないのである。同じことは、疑問代名詞に対しても成り立っている。

(107) Quoi de nouveau ?(朝倉, 1955, p.124)

(b)イタリア語

イタリア語でも、不定代名詞や疑問代名詞を形容詞で修飾する場合は、前置詞 di を介して、名詞に後置される(坂本, 1979, pp.166-167; Serianni, 1991, pp.290-291)。

(108) C'è	qualcosa	di	nuovo ?			(坂本, 1979, pp. 166)
ある	何か	DI	新しい			
「何か変わったことがありますか？」						
(109) Egli	non	fa	nulla	di	buono.	(*ibid.*)
彼は	ない	する	何も…ない	DI	よい	
「彼はよいことなどちっともしない。」						

(c)スペイン語

スペイン語では、不定代名詞 algo「何か」と nada「何も…ない」が、haber「ある」や tener「持っている」の直接目的語である場合に、形容詞が前置詞 de を介して後置される(高橋, 1967, p.101, pp. 276-277; *Esbozo*, pp.415-416; Bäckvall, 1967; Fernández Ramírez, 1987, pp.302-303, p.306)。

(110) ¿Tiene　algo　de　importante ?
　持っている　何か　DE　重要な
　「重要なことがなにかあるか？」
　(高橋, 1967, p. 277)

(111) No　hay　nada　de　particular　(*ibid.*)
　ない　ある　何も…ない　DE　特別な
　「特別なことはなにもない。」

以上のように、ロマンス諸語においては不定代名詞を形容詞で修飾する場合、形容詞は前置詞を介して不定代名詞に後置される[18]。この場合に使用される前置詞は、もともと部分を表すものだったと考えられる。つまり、形容詞で表される性質を有したもの全体の一部が前置詞によって取り出され、その一部分を不定代名詞が指しているのである。例えば、quelque chose d'intéressant は興味あるもの全体の中のある一部分のこととなる(朝倉, 1955, p.124; Le Bidois et Le Bidois, 1971, p.88, p.234)。スペイン語に関しても、*Esbozo* (1975, p.415) や Fernenández Ramírez (1987, pp.293-294) は《algo/nada + de + 形容詞》の前置詞 de を部分を表すものとしている。ロマンス諸語のこの表現法は、部分を表す形式を用いているという点で、かつてのドイツ語やオランダ語に見られるものと類似していると言える。

Le Bidois et Le Bidois (1971, p.88, p.234) は、この de の用法をラテン語の以下の語法と比較している。

(112) aliquid　novi　(Le Bidois et Le Bidois, 1971, p.234)
　何か[主・対格]　新しい(もの)[属格]
　「何か新しいもの」

(113) sub　sole　nil　novi　(*idem.* p.88)
　の下に　太陽　何も…ない[主格]　新しい(もの)[属格]
　「太陽の下に新しいものは何もない。」

ここでは、不定代名詞 aliquid「何か」や nil「何も…ない」を修飾する形容詞 novus「新しい」は中性単数属格になっている。この形容詞は名詞化されていて、「新しいもの」を意味している。これを部分の属格にすることにより、全体として「新しいものの中のいくらか(何も…ない)」という表現になっている[19]。

更に、Azoulay-Vicente (1985, p.217) は以下の (a) の文の論理表示として (b) を与えている。

(114) a. Quelqu'un de sérieux a parlé. (Azoulay-Vicente, 1985, p.217)

b. Quelqu'un x, x∈S, x a parlé

S = ensemble d'êtres humains défini par la propriété *sérieux* (*ibid.*)

(115) a. Tu as fait quelque chose d'intéressant. (*ibid.*)

b. Quelque chose x, x∈I, tu as fait x

I = ensemble d'objets inanimés défini par la propriété *intéressant* (*ibid.*)

ここでは、形容詞で表される性質で規定される集合に属する要素を問題にしているが、これは前置詞 de が部分を表すものだという考え方と合致する (cf. Hulk, 1996)。

以上見てきたように、ロマンス諸語においても、不定代名詞を形容詞で修飾する場合には、部分を表す形式を用いることによって、不定代名詞が名詞句の最後に現れることがないようになっている。このことは、仮説 (103) に合致している。

5.3. ロマンス諸語における形容詞の前置

ここまでは名詞句内での不定代名詞の位置に注目してきたが、ここでは、逆に、形容詞の位置に注目する。ロマンス諸語では形容詞は名詞に後続するのが普通であるが、様々な要因によって前置される場合がある。

(a) フランス語

フランス語においては、名詞に前置される形容詞として、épithète de nature

と呼ばれるものがよく知られている。これは、名詞の意味に当然含意されている性質を表す形容詞のことであり、名詞に前置される。

(116) un rapide éclaire; le triste hiver; la vaste mer; une faible femme; un pieux évêque; un savant professeur; etc. (朝倉, 1955, p.35)

この場合、形容詞は、名詞の外延を狭める働きをしていない。つまり、名詞句全体の指示対象の確定に寄与していないのである。形容詞の表す意味が名詞自体に含まれていなくても、名詞句の指示対象がその性質を有していることが文脈から分かっている場合には、形容詞は前置される(Aoki, 1991, p.42)。

(117) A quelques mètres devant moi, au croisement, une auto, venant à vive allure de la rue du Ranelagh, stoppa de justesse pour éviter un piéton qu'elle prit dans le pinceau lumineux de ses phares. L'automobiliste et l'*imprudent* piéton échangèrent des invectives sonores. (Léo Malet, in Aoki, 1991, p.42)

一般的には、名詞を形容詞で修飾すれば、名詞句の指示しうる対象の範囲を狭める働きをする。例えば、un livre intéressant「おもしろい本」と言えば、「本」の中で「おもしろくないもの」は除外され、「おもしろいもの」が残る。しかし、上述の例では、形容詞は名詞の指示しているものを制限する役割を果たしていないのである(cf. Wilmet, 1981, p.43; Martin, 1986, pp.255-257)。

(b) スペイン語

スペイン語でも同じことが成り立っている。以下では、名詞の意味に含意されている性質を表す形容詞は前置されているのに対して、そうでない形容詞は後置されている。(cf. 高橋, 1967, p.98; *Esbozo*, p.410; Givón 1990, pp.473-474)

(118) la　blanca　nieve　(高橋, 1967, p.98)
定冠詞　白い　雪
「白い雪」

(119) la　mano　blanca　(*ibid.*)
定冠詞　手　白い
「白い手」

(120) la　dulce　miel　(*ibid.*)
定冠詞　甘い　蜜
「甘い蜜」

(121) la　voz　dulce　(*ibid.*)
定冠詞　声　やさしい
「やさしい声」

以下の例では形容詞を名詞に前置することも後置することもできる。

(122) un　hermoso　edificio　(Bolinger, 1952, p.1121)
不定冠詞　美しい　建物
「美しい建物」

(123) un　edificio　hermoso　(Bolinger, 1952, p.1121)
不定冠詞　建物　美しい
「美しい建物」

この場合、Bolinger (1952, p.1121) によると、(122) のように形容詞を前置すると話者は建物を一つ思い浮かべているだけなのに対して、(123) のように形容詞を後置すると他の美しくない建物と対比しているのである。つまり、後置された形容詞は指示する範囲を限定する働きをしているのに対して、前置された形容詞はそのような働きをしていないのである。

(c) イタリア語

イタリア語でも、名詞の意味と当然の関係を持っている性質を表す形容詞は前置される（坂本, 1979, p.68；Renzi, 1991, pp.430-433）。

(124) una　dolce　carezza　（坂本, 1979, p.68）
不定冠詞　やさしい　愛撫
「やさしい愛撫」

(125) un　triste　addio　(*ibid.*)
不定冠詞　悲しい　別れの言葉
「悲しい別れの言葉」

以下の例では、(126) では形容詞が後置されているのに対して、(127) では同じ形容詞が前置されている（冠詞の相違にも注意されたい）。

(126) Luca　è andato　a　Roma　con　un　suo
ルカ　行った　に　ローマ　と　不定冠詞　彼の
amico　simpatico.　(Renzi, 1991, p.430)
友人　感じのいい
「ルカはある感じのいい友人とローマに行った。」

(127) Luca　è andato　a　Roma　con　il　suo
ルカ　行った　に　ローマ　と　定冠詞　彼の
simpatico　amico.　(*ibid.*)
感じのいい　友人
「ルカは彼の感じのいい友人とローマに行った。」

Renzi (1991, p.430) によると、(126) ではルカとローマに行った人物は「友人」の集合の中の「感じのいい友人」という部分集合に属する誰かであると言うことしか分からないのに対して、(127) ではルカの特定の友人を念頭に置いて、その人物に対して「感じがよい」という意見が表明されている。つまり、ここで

も、後置された形容詞は指示対象を限定しているのに対して、前置された形容詞はそのような働きをしていない(cf. Serianni, 1991, p.201)。

以上のように、ロマンス諸語では、指示対象を限定する働きをしない形容詞は前置される[20)]。このことは、仮説(103)を例証するものである。

5.4. まとめ

不定代名詞を形容詞で修飾する場合、不定代名詞が名詞句の最後に現れないようになっていることが通言語的に観察される。また、ロマンス語においては、名詞の外延を狭めない形容詞が前置される。これらの観察から、名詞句内では、名詞句全体の指示対象の確定に対する寄与が小さい要素から大きい要素へと配列しようとする傾向があることが推測される。4.2 で提案した仮説(60)は、この傾向の現れと見ることができる。

6. 結　語

主節平叙文おいて文体的倒置を適用された主語は焦点である。これに対して、関係節における倒置主語も焦点であると考えることによって多くの事実が説明できる。しかしながら、関係節における文体的倒置を主語の焦点化とする仮説には、以下の問題点がある。

1)焦点は断定領域に現れるはずだが、制限的関係節は概ね前提領域であるので、焦点が現れるとは考えられない。2)関係節における倒置主語は、主節平叙文における倒置主語と異なり、前方照応的に解釈できる。3)関係節における倒置主語は、特に短いものを観察すると、固有名詞や人間を指す単数の名詞句が倒置する率が高い。4)関係節においては、倒置主語の後に容易に他の要素が現れる。よって、制限的関係節における倒置主語は焦点でないと考えられる。

関係節においては、individuation の高い主語の方が、そうでない主語より倒置しやすいと言える。このことから、制限的関係節においては、主語名詞句

が先行詞の指示対象の確定に寄与している程度が動詞よりも高く、動詞の方は主語の先行詞に対する関係を表しているにすぎない場合に、文体的倒置が適用されるという仮説を提案した。

フランス語の関係節における文体的倒置に対するこの制約は、名詞句内の要素を名詞句全体の指示対象の確定に対する寄与が小さいものから大きいものへと配列しようとする傾向の現れであると考えられる。この傾向は、多くの言語で不定代名詞を形容詞で修飾する場合や、ロマンス語において形容詞を前置する場合において観察される。

注

* 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金(奨励研究(A)課題番号 12710289)の助成を受けて行われた研究の成果の一部である。

1) 東郷・大木(1986)での例文の評価は、(++)très naturel, (+)naturel, (0)moyennement naturel, (−)peu naturel, (−−)pas naturel du tout の5段階評価で、9人のインフォーマントのそれぞれの回答を＊で示してある。

2) 但し、制限的関係節であっても、先行詞に不定冠詞を伴うものは、その内容が断定されており、そのために文体的倒置を許容する。
   (i) Between the lobby and the vault is a hallway in which stands an armed guard. (*idem*, p.490)

3) 同じことは疑問詞疑問文における文体的倒置についても成り立っている。
   (i) Il est indiscutable que le roi mourut en 1300.
      a. Mais, en quel mois arriva cet événement ?
      b. Mais, en quel mois cet événement arriva-t-il ?
   平塚(近刊)では疑問詞疑問文における倒置主語が焦点でないことを示したが、関係節が疑問詞疑問文と同様に前方照応的な主語を許容することは、関係節における倒置主語も焦点でないということを強く示唆する。

4) Gildin は、イェーツの修正を施さずに χ^2 検定を行ったと思われる。イェーツの修正を施した場合は、$\chi^2=3.28$、$p<0.1$ となり、それほど有意な差ではなくなる。主語の数と倒置との相関関係をより明らかにするためには、データを増やしたり、不可算名詞を除外したりする必要があると思われる。

5) Wall は主語を以下のように分類している。
   (i) Jean:一語からなる固有名詞。
   (ii) Jean Brun:二語からなる固有名詞、称号＋固有名詞。
   (iii) le S:定冠詞付きの名詞。
   (iv) ce S:指示形容詞付きの名詞。
   (v) mon S:所有形容詞付きの名詞。
   (vi) un/du S:不定冠詞・部分冠詞付きの名詞。
   (vii) trois S:数詞付きの名詞。
   (viii) tout S:不定形容詞付きの名詞。

ここでは、(i)～(ii)を固有名詞、(iii)～(viii)を普通名詞としてまとめた。

6) この傾向は、短い主語を対象とした場合に現れてくるようである。Fuchs(1997)がLe Mondeから採集した名詞句主語を含む関係節157例全体のうち倒置していたのは、42例(27%)だったのに対して(p.137)、限定辞を伴わない固有名詞だけからなる主語22例のうち倒置していたのは10例(45%)、定冠詞を伴う固有名詞だけからなる主語9例のうち倒置していたのは3例(33%)、固有名詞を含む名詞句からなる主語12例のうち倒置していたのは3例(25%)だった(p.155)。

7) ここでは、注5に挙げた分類のうち、(i)～(vi)を定名詞句、(vii)～(viii)を不定名詞句としてまとめた。

8) Korzen(1996, p.36)によると、疑問詞疑問文における文体的倒置でも、倒置主語の後に容易に他の要素をもってくることができる。

(i) Où était garée la voiture de votre père, avant-hier ? (Korzen, 1996, p.36)

平塚(近刊)で示したとおり、疑問詞疑問文における文体的倒置は主語の焦点化の操作ではないので、疑問詞疑問文と同様に関係節でも倒置主語の後に他の要素が容易に現れうることは、関係節においても倒置主語は焦点でないことの根拠となる。

9) Fournier(1997, p.106)は、主節平叙文でtout, rien, personneといった不定代名詞を倒置できないと述べていることから、不定代名詞が焦点になれないという考え方は支持されうる。

10) 3.1で、制限的関係節の内容は断定されないので、焦点が来ることはないと述べた。(72)で倒置主語が対比的焦点になっていることは、これと矛盾している。これは前提領域内でも、対比的焦点が来ることが可能であることを示唆しているが、この問題については本稿では論じない。

11) 直接目的語が代名詞化されれば、主節平叙文でも、関係節でも、文体的倒置が可能になる場合がある。

(i) A Dunkerque les attendaient des automobiles. (in Atkinson, 1973, p.73)

(ii) Son visage était boursouflé, à la fois de sommeil et de l'angoisse où l'entraînaient ses cauchemars. (in Wall, 1980, p. 93)

また、直接目的語が無冠詞で動詞と熟語をなす場合にも倒置している例がある。

(iii) A cette antichambre faisait face une salle d'opération. (in Atkinson, 1973, p.82)

(iv) cette espèce d'assurance agressive dont fait preuve depuis quelque temps le ministre français a eu les résultats suivants. (in Wall, 1980, p. 100)

更に、限定辞つきの直接目的語を伴っていても倒置している例がある。

(v) Tandis que la Princesse causait avec moi, faisaient précisément leur entrée, le duc et la duchesse de Guermantes ! (in Atkinson, 1973, p.82)

(vi) (campagne à laquelle ont apporté leur contribution les pilotes américains récemment libérés en racontant les sévices auxquels ils ont été soumis en captivité). (in Wall, 1980, p. 98)

しかしながら、主節平叙文では、目的語を伴う他動詞の場合でも、動詞句は主語の指示対象の談話内世界への導入に適したものであるように思われる。それに対して、関係節では、そのような動詞句でなくても、主語の先行詞に対する関係を表している動詞句ならよいように思われる。Le Bidois(1952, p.267)は、限定辞つきの目的語を伴う倒置構文は特に関係節において見られると述べているが、これは主節平叙文よりも関係節の方が倒置構文の動詞に対する制約が緩いためではないかと考えられる。以上の事柄は、直接目的語が多くの場合倒置構文を妨げることを、形式的な制約で説明するのは適切ではなく、意味論的・語用論的観点から説明すべきことを示している。

12) 本文に挙げた以外の採取例を挙げておく。

(i) Le mourant, à ce *que me dit quelqu'un*, aurait passé toute sa dernière journée de vie à

faire ses comptes et à rechercher une somme de cinq francs, qui devait lui être due par la caisse de l'événement. (Goncourt, E. et J., *Journal : 1879-1890*, in *DISCOTEXT 1*)

(ii) Les choses que vous dites paraissent venir d'un monde étranger *que ne connaîtrait personne*. (Bloy, L., *La Femme pauvre*, in *DISCOTEXT 1*)

(iii) C'est l'effet *que me produit maintenant tout le monde*. (Flaubert, G., *Correspondance*, in *DISCOTEXT 1*)

(iv) De la grande route *où ne passe jamais personne*, on aperçoit cette maison au fond d'un jardin tellement funèbre qu'un certain jour, un étranger, fatigué de vivre, vint sonner à la grille pour demander qu'on l'y enterrât. (Bloy, L., *La Femme pauvre*, in *DISCOTEXT 1*)

(v) Et sans doute, cet emplacement, l'automobile n'en faisait pas, comme jadis le chemin de fer, quand j'étais venu de Paris à Balbec, un but soustrait aux contingences de la vie ordinaire, presque idéal au départ et qui, le restant à l'arrivée, à l'arrivée dans cette grande demeure *où n'habite personne* et qui porte seulement le nom de la ville, la gare, a l'air d'en promettre enfin l'accessibilité, comme elle en serait la matérialisation. (Proust, M., *La Recherche : Sodome et Gomorrhe*, in *DISCOTEXT 1*)

これらの例においても、様々な要因によって動詞の意味内容が希薄になっていると考えられる。

13) 本稿ではロシア文字を ISO 規格に従ってローマ字に翻字した (Wade, 2000, pp.1-2)。

14) 本稿では現代ギリシア語を Verbrugghe (1999) に従ってローマ字に転写した。

15) 形容詞を強調するために名詞の後に持ってくることも可能である (Mirambel, 1959, pp.199-201 ; Holton et al., 1997, p.286)。

(i) mia　karekla　kokkini　(Holton et al., 1997, p.286)
不定冠詞　椅子　赤い

(ii) o　antras　o　oreos　(*idem.*)
定冠詞　男　定冠詞　ハンサムな

この場合、形容詞に強勢が来て、しばしば被修飾語と修飾語の間に切れ目が感じられる。また、名詞が定冠詞に先立たれている場合には、形容詞の前で定冠詞を繰り返さなければならない。このことは、形容詞の後置が有標であることを反映していると考えられる。

16) 現代ドイツ語では、形容詞の強変化は、中性単数において以下のようになっている。
主格 : gutes　属格 : guten　与格 : gutem　対格 : gutes
ここで、属格は guten なので、etwas Gutes の Gutes が属格であったという説明に疑問をもたれるかもしれない。しかし、中高ドイツ語においては、中性単数の形容詞の強変化は以下のようなものであった (相良, 1954, p.24)。
主格 : guotez　属格 : guotes　与格 : guotem [e]　対格 : guotez
(ただし、主格・対格には guot という無語尾の形態も存在した。)
後に音韻変化により主格・対格の語尾 -ez が -es となったので、この時点で etwas Gutes の Gutes が主格・対格と再解釈されたと考えられる。一方、強変化の属格語尾 -es は、弱変化に由来する -en に置き換えられた (Paul, 1959, p.102)。

17) jemand や niemand の後では、現代語においても、形容詞は部分の属格に由来する形態で現れる場合がある。次の文では、与格の Fremdem だけでなく、Fremdes も可能である (Grebe ed., 1973, p.299 ; Dal, 1962, p.27)。

(i) Sie　schenkte　niemand　{Fremdem / Fremdes}
彼女は　寄せた　誰にも…ない　知らない
ihr　Vertrauen.　(Grebe ed., 1973, p.299)
彼女の　信頼
「彼女は誰も信頼しなかった。」

18) カタロニア語やブラジル・ポルトガル語においても、同様の現象が観察される(Wheeler et al., 1999, p.139; Thomas, 1969, p.62, p.293)。

19) 形容詞が不定代名詞と同格におかれる場合もある。

(i) aliquid　bonum　(Gildersleeve & Lodge, 1895, p.235)
何か[主・対格]　よい[主・対格]
「何かよいもの」

また、形容詞が属格になりうるのは第 2 曲用をする形容詞の場合であり、第 3 曲用をする形容詞は不定代名詞と同格におかれる。

(i) aliquid　memorabile　(*ibid.*)
何か[主・対格]　記憶すべき[主・対格]
「ある記憶すべきこと」

詳細については、Hofmann(1965, pp.57-58)、Kühner & Stegmann(1966, pp.430-431)を見られたい。

20) カタロニア語やブラジル・ポルトガル語においても同様である(Wheeler et al., 1999, pp.86-90; Thomas, 1969, pp.49-53)。

参考文献

Allan, R. et al. (1995) *Danish: A Comprehensive Grammar*, London and New York, Routledge.

Aoki, S. (1991) "La place de l'adjectif qualificatif et l'ordre des mots", *Bulletin d'Etudes de linguistique française* 25, pp. 39-43.

朝倉季雄(1955)『フランス文法辞典』、東京、白水社。

Atkinson, J. C. (1973) *The Two Forms of Subject Inversion in Modern French*, The Hague, Mouton.

Azoulay-Vicente, A. (1985) *Les tours comportant l'expression* de + *adjectif*, Genève, Droz.

Bäckvall, H. (1967) "*Algo* y *nada* (+ de) + adjetivo en el castellano actual", *Ibero-Romanskt* 2, pp.76-93

Björkhagen, Im. (1923) *Modern Swedish Grammar*, Stockholm, P. A. Norstedt & Söners.

Blinkenberg, A. (1928) *L'ordre des mots en français moderne*, première partie, Copenhagen, Levin & Munksgaard.

Bolinger, D. (1952) "Linear Modification", *Publications of the Modern Language Association of America* 67(7), pp.1117-1144.

Dal, I. (1962) *Kurze Deutsche Syntax, Auf Historischer Grundlage*, 2., Verbesserte Auflage, Tübingen, Max Niemeyer.

Donaldson, B. (1997) *Dutch: A Comprehensive Grammar*, London and New York, Routledge.

Esbozo = Real Academia Española (1975) *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa-Calpe.

Fehringer, C. (1999) *A Reference Grammar of Dutch*, Cambridge, Cambridge University Press.

Fernández Ramírez, S. (1987) *Gramática española*, segunda edición, 3.2. El pronombre, preparado por José Polo, Madrid, Arco/Libros.

Fournier, N. (1997) "La place du sujet nominal dans les phrases à complément prépositionnel initial, in C. Fuchs éd., *La place du sujet en français contemporain*, Louvain-la-Neuve, Duculot, pp.97-132.

Fuchs, C. (1997) "La place du sujet nominal dans les relatives", in C. Fuchs éd., *La place du sujet en français contemporain*, Louvain-la-Neuve, Duculot, pp.135-178.

Gildersleeve, B. L. & G. Lodge (1895) *Gildersleeve's Latin Grammar*, 3rd ed., London, Macmillan.

Gildin, B. L. (1980) "Subject Inversion in French: Natural Word Order or *l'arbitraire du signe* ?", in F. H. Nuessel Jr. ed., *Contemporary Studies in Romance Languages*, Bloomington, Indiana University Linguistics Club, pp. 58-72.

Givón, T. (1990) *Syntax: A Functional-Typological Introduction*, vol. II, Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins.

Grebe, P. ed. (1966) *Duden: Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*, Mannheim, Bibliographisches Institut.

Grevisse, M. (1986) *Le bon usage*, douzième édition refondue par André Goosse, Louvain-la-Neuve, Duculot.

Hammer, A. E. (1995) *Hammer's German Grammar and Usage*, 2nd ed., revised by M. Durrell, Lincolnwood, NTC Publishing Group.

ヘルビヒ、G./J. ブシャ(1982)『現代ドイツ文法』、東京、三修社、[原著: G. Helbig/J. Buscha (1977) *Deutsche Grammatik : ein Handbuch für den Ausländerunterricht*, 4., durchgesehene Aufl., Leipzig, Verlag Enzyklopädie]。

平塚徹(近刊)「フランス語の疑問詞疑問文における文体的倒置について」、『言語学研究』第 20 号。

Hofmann, J. B. (1965) *Lateinische Syntax und Stilistik*, neubearbeitet von Anton Szantyr, München, C. H. Beck.

Holmes, P. & I. Hinchliffe (1994) *Swedish: A Comprehensive Grammar*, London and New York, Routledge.

Holton, D. et al. (1997) *Greek: A Comprehensive Grammar of the Modern Language*, London, Routledge.

Hooper, J. B. & S. A. Thompson, (1973) "On the Applicability of Root Transformations", *Linguistic Inquiry* 4(4), pp.465-497.

Hopper, P. J. & S. A. Thompson, (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse", *Language* 56(2), pp.251-299.

Hulk, A. (1996) "L'«autre» *de* : une tête quantificationnelle ?", *Langue française* 109, pp.44-59.

Jonare, B. (1976) *L'inversion dans la principale non-interrogative en français contemporain*, Uppsala, Uppsala Universitet.

Korzen, H. (1983) "Réflexions sur l'inversion dans les propositions interrogatives en français", *Revue romane* 24, numéro spécial, pp.50-85.

——— (1996) "L'unité prédicative et la place du sujet dans les constructions inversées", ms., [*Langue française* 111, pp.59-82 掲載の同名論文の原稿。未刊行の 4. Les constructions non interrogatives. - 5. Théorie et «réalité» を含む].

Kruisinga, E. (1924) *A Grammar of Modern Dutch*, London, George Allen & Unwin Ltd.

Kühner, R. & C. Stegmann (1966) *Ausführliche Grammatik der Lateinischen Sprache*, T. 2, Satzlehre, Bd. 1, Hannover, Hahn.

Le Bidois, G. & R. Le Bidois (1971) *Syntaxe du français moderne*, Paris, A. et J. Picard.

Le Bidois, R. (1952) *L'inversion du sujet dans la prose contemporaine (1900-1950) étudiée plus particulièrement dans l'œuvre de Marcel Proust*, Paris, d'Artrey.

Martin, R. (1986) "La vague et la sémantique de l'adjectif : réflexion sur l'adjectif antéposé en français", *Quaderni di semantica* 7, pp.243-263.

Mirambel, A. (1959) *La langue grecque moderne*, Paris, Klincksieck.

丹羽卓(1982)「現代フランス語の主語倒置:その構造と機能」、『フランス語学研究』第 16 号、pp.29-38。

Nordahl, H. (1973) "Inversion et progression dans la subordonnée relative en français moderne", *Le français moderne* 41, pp.113-130.

Paul, H. (1959) *Deutsche Grammatik*, Bd. III, Teil IV: Syntax (Erste Hälfte), 5. Aufl., Halle, Max Niemeyer.

Renzi, L. ed. (1991) *Grande grammatica italiana di consultazione*, vol. I, *La frase, I sintagmi nominale e preposizionale*, Bologna, Il Mulino.

相良守峯(1954)『Mittelhochdeutsche Grammatik(中高ドイツ語)』、東京、南江堂。

坂本鉄男(1979)『現代イタリア文法』、東京、白水社。

Serianni, L. (1991) *Grammatica italiana: italiano comune e lingua letteraria*, seconda edizione, Bologna, UTET.

高橋正武(1967)『新スペイン広文典』、東京、白水社。

Thomas, E.W. (1969) *The Syntax of Spoken Brazilian Portuguese*, Nashvill, Vanderbilt University Press.

Timberlake, A. (1977) "Reanalysis and Actualization in Syntactic Change", in Ch. N. Li ed., *Mechanisms of Syntactic Change*, Austin, University of Texas Press, pp.141-177.

東郷雄二・大木充(1986)「フランス語の主語倒置と焦点化の制約・焦点化のハイエラキー」、『フランス語学研究』第 20 号、pp.1-15。

――――(1987):「非人称構文の談話機能について:倒置構文との比較をめぐって」、『フランス語学研究』第 21 号、pp.1-19。

Verbrugghe, G. P. (1999) "Transliteration or Transcription of Greek", in *Classical World* 92(6), pp.499-511

Wade, T. (2000) *A Comprehensive Russian Grammar*, 2nd ed., Oxford, Blackwell.

和久利誓一(1960)『テーブル式:ロシア語便覧』、東京、評論社。

Wall, K. (1980) *L'inversion dans la subordonnée en français contemporain*, Uppsala, Uppsala Universitet.

Wheeler, M. W. et al. (1999) *Catalan: A Comprehensive Grammar*, London, Routledge.

Wilmet, M. (1981) "La place de l'épithète qualificatif en français contemporain", *Revue de linguistique romane* 45, pp.17-73.

Stylistic Inversion in French Relative Clauses

Tohru HIRATSUKA

Abstract

There is no doubt that an inverted subject is the focus in matrix declarative sentences, however it is erroneous to suppose that the same is true in French relative clauses, because of the following facts: 1) restrictive relatives clauses, whose content is normally presupposed, cannot contain a focus constituent; 2) an inverted subject in relative clauses can be interpreted anaphorically; while one in main clauses cannot; 3) in relative clauses, among one or two words long subjects, proper noun subjects and human singular subjects invert frequently; 4) a prepositional or adverbial phrase can easily appear after the inverted subject in relative clauses. It can therefore be safely concluded that an inverted subject in relative clauses is not the focus.

In relative clauses, *individuated* subjects invert more frequently than *non-individuated* ones. This leads to the following hypothesis: in restrictive relative clauses, stylistic inversion is possible if the subject contributes to determining the referent of the antecedent more than the verb and the verb merely expresses the relation between the subject and the antecedent.

This restriction on stylistic inversion in French relative clauses can be understood as a manifestation of the cross-linguistic tendency that, the more an element of a noun phrase contributes to determining its referent, the more rightward it moves, and *vice versa*. This tendency is observed in the following phenomena: 1) an indefinite pronoun precedes the adjective modifying it in many languages; 2) an adjective precedes the noun it modifies, when it does not reduce the extension of the noun, in Romance languages.

Keywords: French, stylistic inversion, relative clause, indefinite pronoun, word order.